史跡諏訪原城跡保存整備　　復元検討委員会資料

説明資料

１．　諏訪原城の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１

２．　二の曲輪北馬出の位置と整備の目的　・・・・・・・・・・・・・・・２

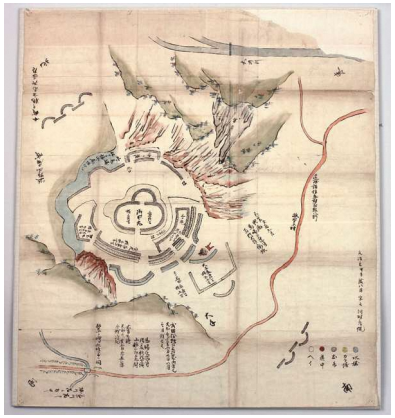
３．　発掘調査の結果　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３～４

４．　復元検討委員会の経緯と現在の状況　・・・・・・・・・・・・・・・５

５．　門周辺の整備の概要について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・６～８

６．　土塁と立体工作物について整備（案）　・・・・・・・・・・・・・・９

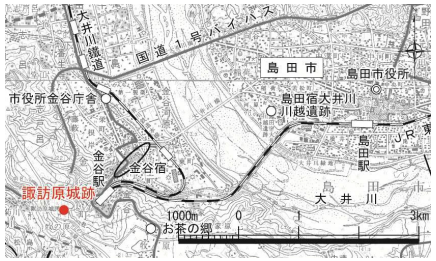
1. 諏訪原城の概要



諏訪原城絵図面（島田市博物館蔵）

▲諏訪原城跡遠景

▼諏訪原城位置図



● 史跡指定

昭和 50 年 11 月 25 日

平成 14 年 12 月 19 日

指定総面積　113,305 ㎡

● 指定理由（S50.11.25）

諏訪原城跡は、大井川右岸の牧之原台地の北部、戦国時代の東海道における戦略上の要地に位置する。はじめ武田信玄が城郭を築いて、徳川に対する備えとし、天正元年（1572 年）にその子勝頼によって大規模な修築ら加えられたが、現在その修築時の堀、土塁、丸馬出が遺存している。この城跡は、後世の軍記等に「名城」とうたわれた雄大な規模を今日に伝え、武田流の築城術や軍略をうかがい知ることができるばかりでなく、織豊政権立までの戦国時代の過程を理解するうえで見逃すことのできない重要な遺跡である。

● 追加指定理由（H14.12.19）

天正３年（1575）に徳川家康が攻略し、その後大改修を行った。
徳川氏によって改修、拡張された部分の一部を追加指定する。

● 諏訪原城の歴史

天正元年（1573）、武田勝頼は遠江侵攻の拠点とするために、家臣の馬場美濃守信春に命じて牧之原台地に城を築いた。

天正３年（1575）、徳川家康によって攻め落とされたのち、牧野城と改名し、城番をおいて駿河に対する最前線拠点とした。又、併せて１年間にわたり駿河の前国守今川氏真をおいて駿河進攻の旗印とした。城番であった松平家忠が記した「家忠日記」には、武田氏との攻防戦や、彼が城番のたびに行った普請にかかわる記述が散見できる。特に普請に関しては「普請」「番普請」「牧野市場普請」「塀普請」「堀普請」という表現で、天正９年の高天神城落城後まで記されており、牧野城が徳川氏によって長期間にわたって大改修されたことがわかる。天正９年（1581）に、高天神城が落城し、翌年、武田氏が滅亡するとこの城の必要性は無くなった。その後、徳川家康が関東に移ったことから、天正 18 年（1590）頃廃城になったと言われている。

● 諏訪原城の特長

一、武田流築城術の典型の城

攻撃のために備えられた三日月堀と曲輪（平坦地）がセットになった大きな「丸馬出」が残っている。発掘調査により徳川氏によって改修された可能性が大きいことがわかった。

二、地形に守られた「後ろ堅固」の城

大手（表口）側は平坦だが、本曲輪東側が断崖絶壁で、当時、城の眼下を大井川が流れる自然地形によって守られていた。

三、街道と密接に結びついた城

東海道が城域内を通過し、東西交通の要衝の地に築かれた城である。

四、縄張の傑作の城

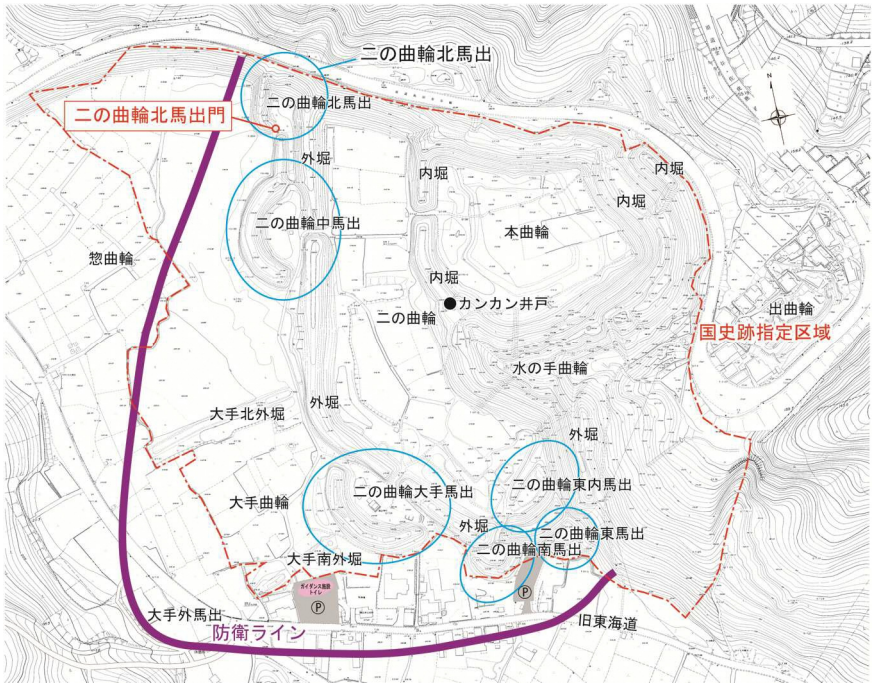
本曲輪を扇の要（かなめ）にたとえ、扇状に曲輪が広がっていることから、のちに扇城とも言われるようになった。

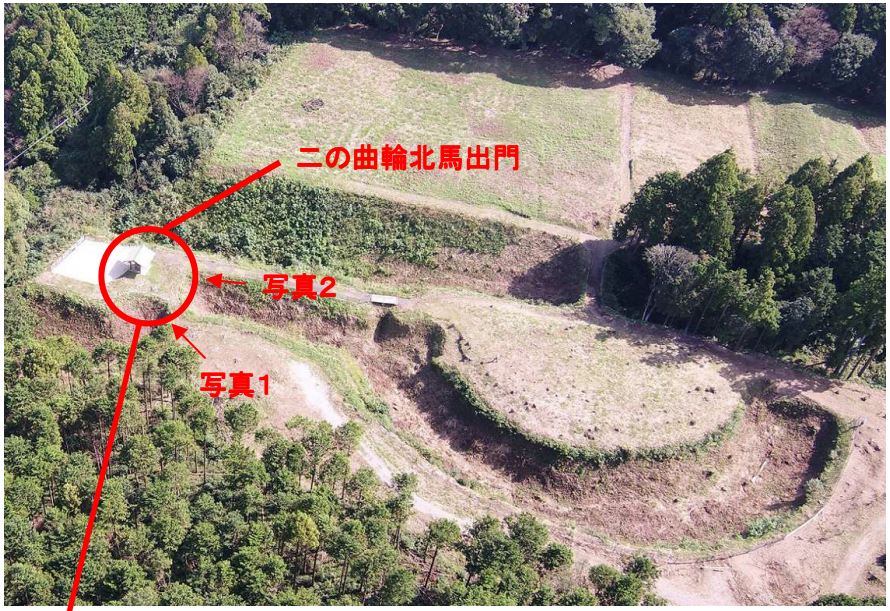
2. 二の曲輪北馬出の位置と整備の目的

● **二の曲輪北馬出周辺の整備の目的**　『諏訪原城跡整備基本計画』平成 22 年度より

諏訪原城は土塁や曲輪、壮大な空堀が特徴の守り強固な城である。

また、二の曲輪北馬出は、発掘調査により、門を含めた曲輪の構造が唯一把握できた場所である。そこで戦国期の防御構造が判明する貴重な事例と判断し、二の曲輪北馬出の門を含めた土塁等の整備により、その機能をわかりやすく見学者に伝えることを目的とする。





● **二の曲輪北馬出の位置**

諏訪原城は、西側台地から敵が攻めてくることを想定し、二の曲輪外堀の外側に大小６つの馬出をもうけて、強固な防衛ラインを形成している。二の曲輪北馬出は、最北端に位置する。

二の曲輪北馬出門

写真１　惣曲輪側から

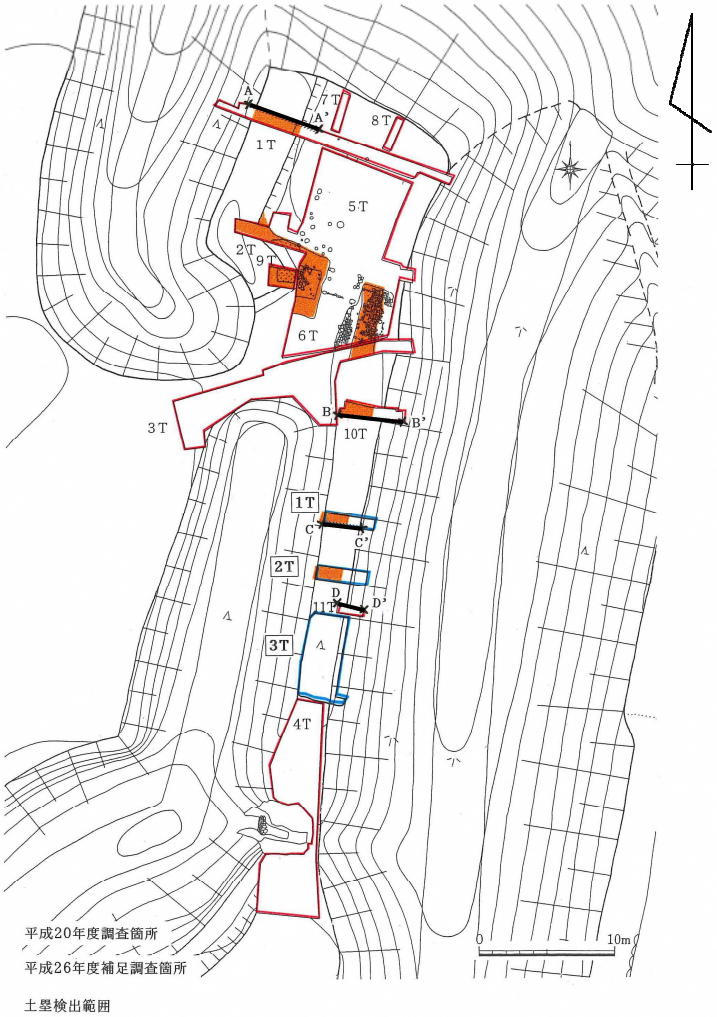
写真２　通路から

3. 発掘調査の結果

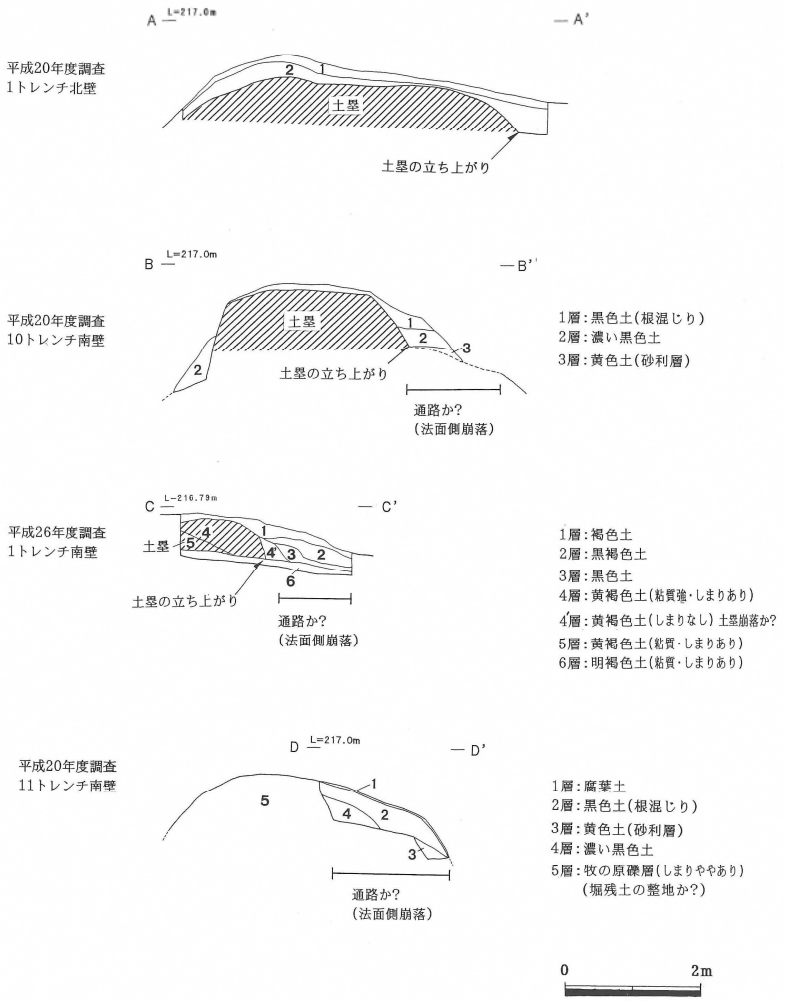
● 二の曲輪北馬出の発掘調査結果

二の曲輪北馬出は、二の曲輪中馬出のより強固な防備を目指した重ね馬出の前面部である。この箇所の発掘調査では、曲輪西側のＬ字形の土塁が検出され、土橋方向に対して横矢が効き防備を強固にする造りであることが判明した。また中馬出に続く通路の一部でも土塁の基底部が確認された。しかし、土塁の上部が削減されていたため、土塁上の構造は不明である。また、土塁と土塁の間に礎石建城門の礎石が確認された。主柱や控え柱の礎石、門止め石、蹴放し石列が検出され、復元に必要な資料を得ることができ、平成 28 年度に門の復元を行った。

二の曲輪北馬出遺構図



二の曲輪北馬出遺構断面図



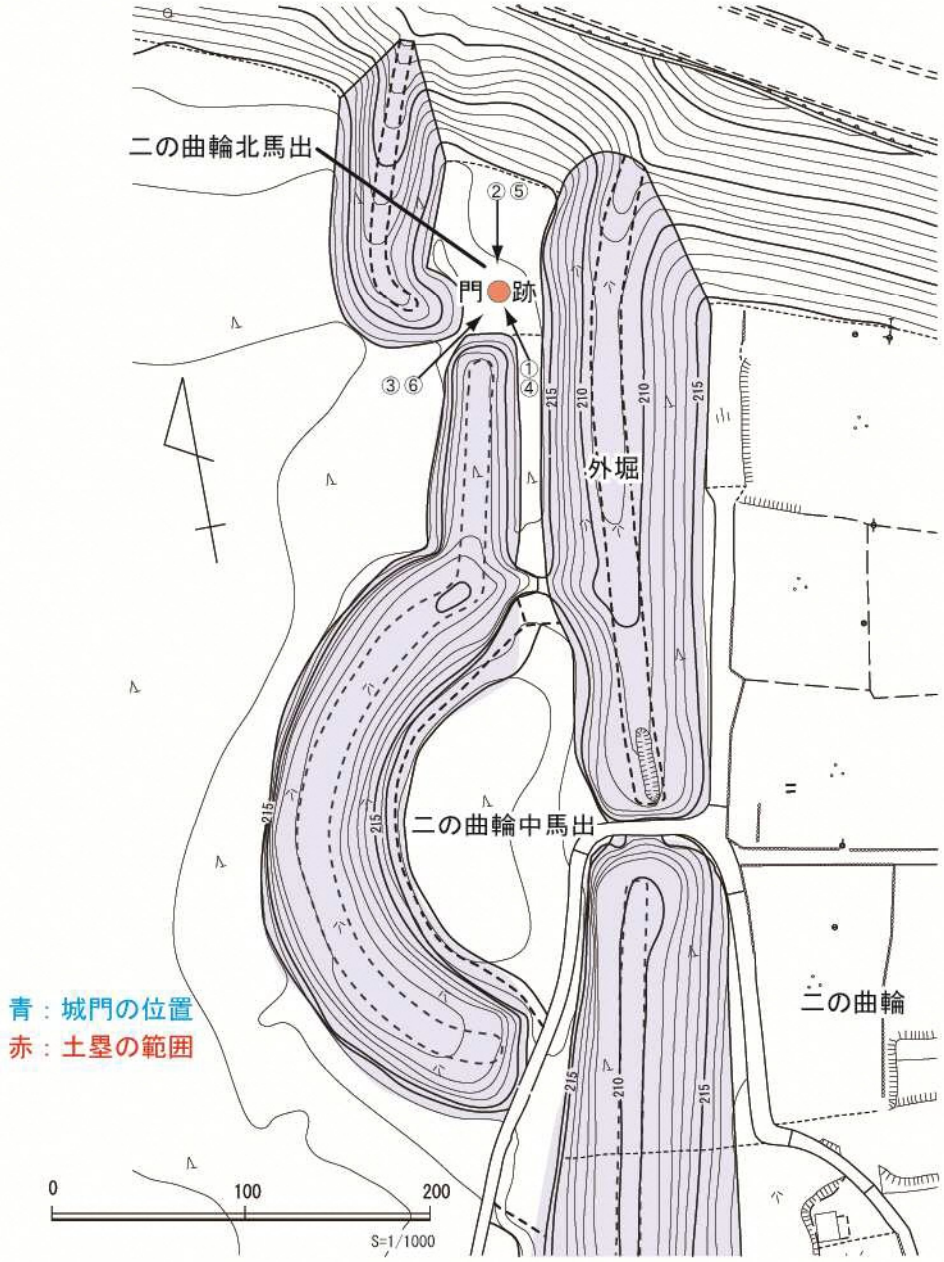
― 二の曲輪北馬出城門について ―

発掘調査前の様子

① 二の曲輪北馬出虎口周辺
（中馬出側から）

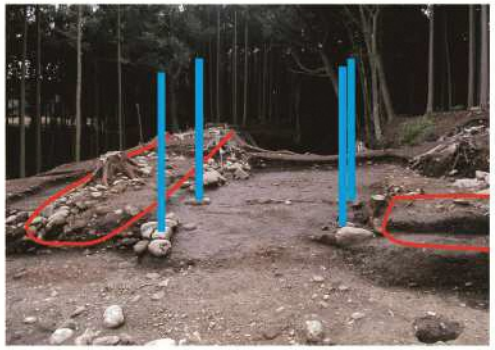
②二の曲輪北馬出虎口周辺
（北馬出側から）

③二の曲輪北馬出虎口周辺
（土橋側から）

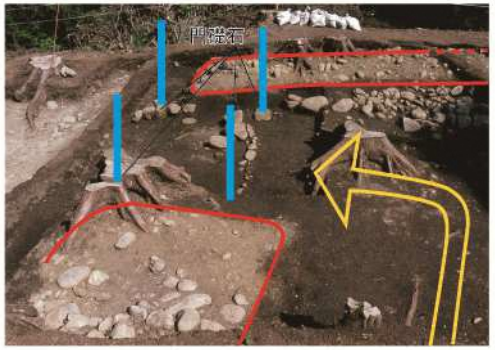


発掘調査の様子

④二の曲輪北馬出虎口周辺
（北馬出南側から）



⑤二の曲輪北馬出虎口周辺
（北馬出北側から）



⑥二の曲輪北馬出虎口周辺
（土橋西側から）

4. 復元検討委員会の経緯と現在の状況

平成 24 年 3 月 27 日　復元検討委員会

史跡全体の現状と特徴、縄張、往時の導線について、二の曲輪北馬出城門の位置づけ、門の比較検討の結果、整備計画等再度資料を提示するよう指導があった。

平成 24 年 12 月 26 日　復元検討委員会

二の曲輪北馬出の門を最初に整備する意義、その他で検出されている門の礎石からの復元案の提示をするとともに、東側土塁の土塀については、残存する土塁跡に茶の木植栽による立体工作物案を提案した。しかし土塁上の立体工作物については、植栽以外の案を検討するよう指導があり、門及び土塁と土塁上工作物の実施設計を取り止め、堀のみの内容とした。

平成 25 年 3 月 27 日　復元検討委員会

門の復元承認。土塀の表現方法については、重ね馬出（二の曲輪東内馬出・二の曲輪南馬出・二の曲輪東馬出）の発掘調査の成果を基に、改めて検討するよう指導を受けた。

↓

平成 29 年３月　門の復元を完成。土塀は未着手状態である。

↓

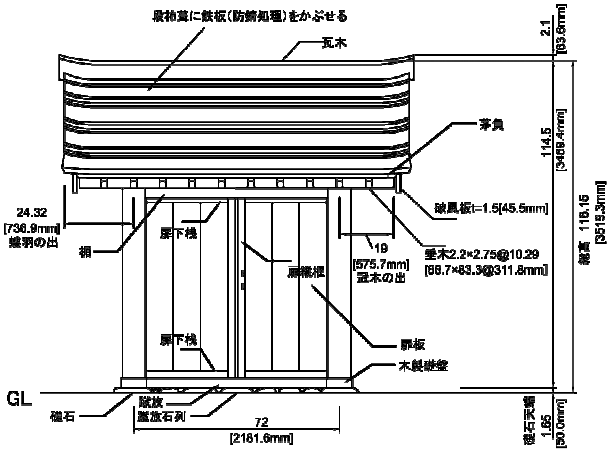
平成 25～27 年度にかけておこなわれた重ね馬出の発掘調査では、復元及び復元的整備に値する土塁上の遺構は確認されなかった。

現在の状況

現在は、城門（薬医門）が復元されているのみで、城内・城外の区域が全くわからない状況である。また見学者は、北馬出に土塁や土塀の立体工作物がないので、城外から侵入してくる敵の視野や立体的構造がイメージできず、二の曲輪北馬出の防御・攻撃機能が理解できない状況である。したがって、門周辺に土塁と塀を一体とした整備が必要不可欠である。

復元城門正面図

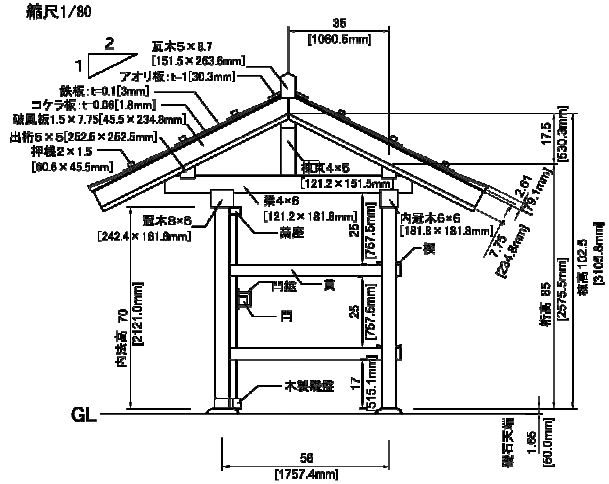
単位寸法：寸（1寸＝30.3mm）
縮尺1/80



二の曲輪北馬出門　正面図

復元城門側面図

単位寸法：寸（1寸＝30.3mm）
縮尺1/80



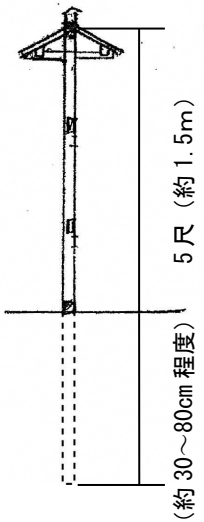
二の曲輪北馬出門　側面図

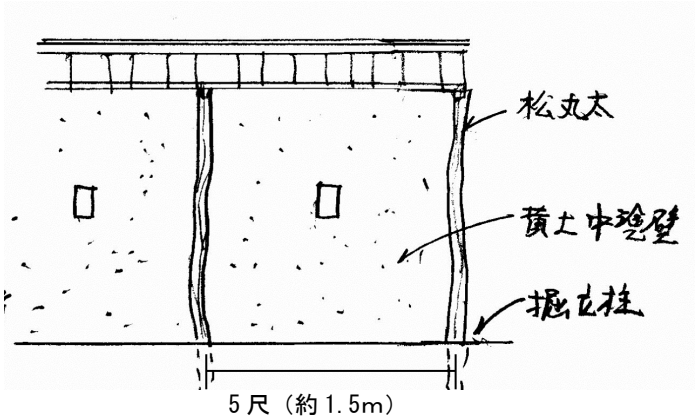
5. 門周辺の整備の概要について

● 諏訪原城に本来想定されている土塀

発掘調査では、城内の他曲輪の発掘調査においても、復元に足る土塀の痕跡を検出することができなかった。しかしながら何らかの防御施設があった可能性が高いため、改めて諏訪原城における土塀がどのような形であったのか、整備委員会で検討を行い、以下の結論を得た。

● 諏訪原城跡整備委員会で考察した土塀



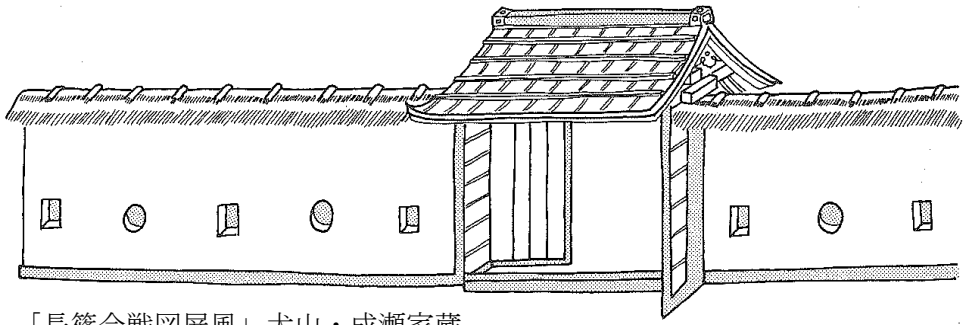


戦国時代の土塀の断面図と立面図のイメージ

● 考察に対する委員会の意見

- 掘立柱のため３～５年で耐用年数がくるため取替が必要になる
- 土塗壁は雨に弱く頻繁に補修が必要になる
- 松丸太は近年材料が入手しにくい
- 曲がった柱の設置や塗り込め等ができる職人がみつけにくい
- 劣化した土塀は、補修工事を行うまで見栄えが悪い
- 施工に手間がかかり、建築工事費用が現代工法より割高になる
- 現地での風倒の恐れがある

● 戦国の山城の土塀の様子　戦国合戦絵屏風に見る塀と柵



「長篠合戦図屏風」犬山・成瀬家蔵

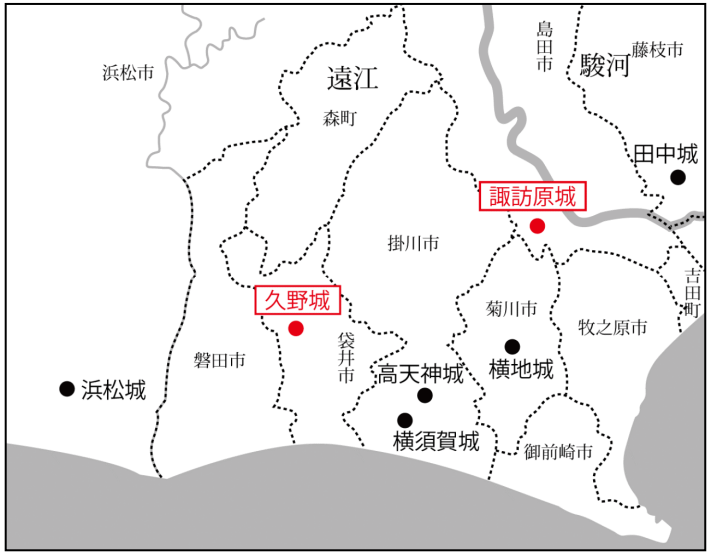
屋　根		壁	
瓦	茅	白	漆喰
	○	○	

秋夜長物語絵巻

● 県内の城の調査事例

久野城（袋井市）

県内の城の調査事例を見ると、久野城（３度折れを持つ土塀を検出）で５尺間隔の掘立柱の事例がある。また、柱穴の形状から丸太を使用したものと考えられ、控え柱は確認されていない。



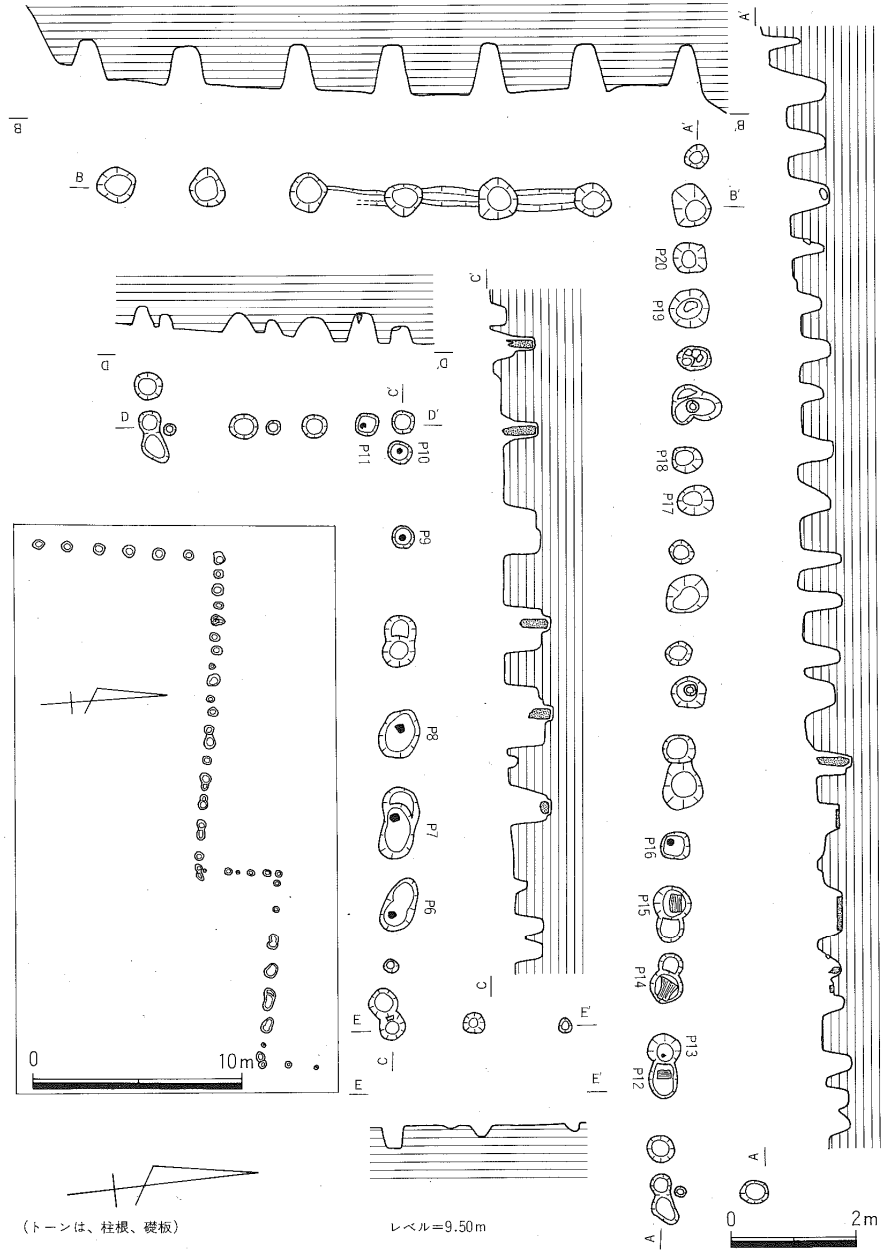
位置図

柱穴遺構の平均深さは基盤面から 70～80ｃｍ程度である。

久野城で確認された塀の周辺部では、白漆喰は出土していないが、土壁材は出土している。瓦についても、少量出土しているのみである。従って、茅葺きもしくは、板葺きの土壁であろう。出土遺物、塀の形態から中世の創築と考えられる。大手道を遮断するための塀で、「折塀」という形状から狭間が想定される。

● その他

16 世紀は、森林資源枯渇の時代で用材が不足していたため、掘立柱は、直径５ｃｍから７ｃｍ程度の曲がった松の丸太を使用している。土塀は、竹小舞に粘土分の強い壁土を使用するため、耐用年数は３年から５年である。屋根は杉皮葺と考えられる。



遺構図「久野城Ⅳ」1993　塀実測図

● 整備された山城等の事例

高根城（静岡県浜松市）市史跡

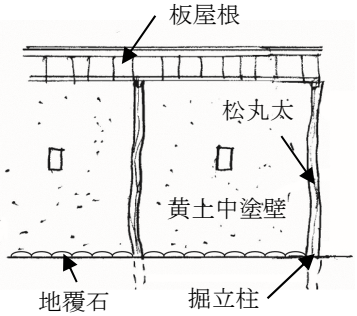
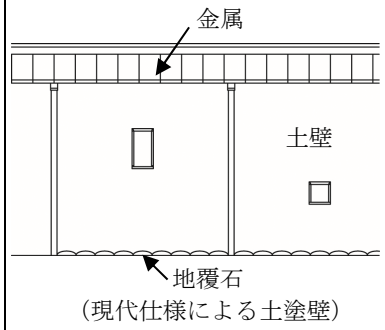
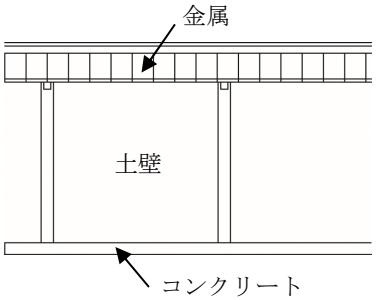
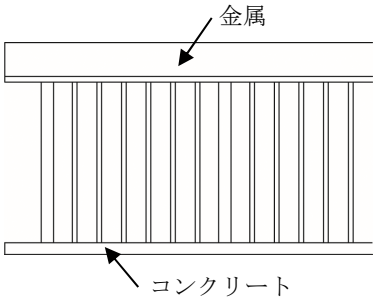
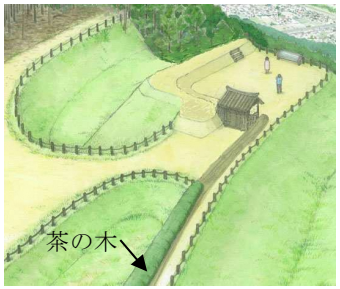
江馬氏館跡（岐阜県飛騨市）国史跡

鉢形城（埼玉県大里郡寄居町）国史跡

一乗谷朝倉氏遺跡（福井県福井市）国特別史跡

6. 土塁と立体工作物について整備（案）

※以下の案の検討をおこなった

	復元案	A 案	B 案	C 案	D 案
図					
内容	松丸太の掘立柱に板屋根、壁は黄土中塗り壁 狭間あり　地覆石あり	土塁と立体工作物の整備 現代工法による土塀の復元、柱は杉丸太、壁は土壁調珪藻土塗り、内部中空、屋根は板屋根に金属 狭間あり　地覆石あり 塀基礎は土塁復元盛土内にコンクリートＴ字形基礎を埋め込み 土塁の遺構が保護できる	土塁と立体工作物の整備 A 案から狭間をなくし、基礎部分の地覆石をコンクリートに変更 塀基礎はＡ案と同じ 土塁の遺構が保護できる	現代的素材で土塀の位置に転落防止柵と土塀の笠を設置 塀基礎はＡ案と同じ 土塁の遺構が保護できる	土塁・土塀の位置を低木（茶の木）植栽で表示する
メリット	城内・城外の区別ができ、北馬出の機能が体感できる 復元した門と一番調和がとれる景観になる	城内・城外の区別ができ、北馬出の機能が体感できる 復元した門と調和がとれる景観になる 当初考察した復元案に近い	城内・城外の区別ができ、北馬出の機能が体感できる 復元した門と調和がとれる景観になる 一番耐久性が高い A 案に比して安価	転落防止になるため安全対策ができる	見た目の違和感ない
デメリット	発掘調査の成果に基づく復元だと認識される場合がある 現地で風倒の可能性がある 施工に手間が掛かり、建築工事費が高くなる	発掘調査の成果に基づく復元だと認識される場合がある コストが高い	現代工法を多用するため雰囲気が復元案と差が出る	当時の雰囲気を見学者が理解しにくい 門との調和がとれない	土塀を植栽で示していることが理解しにくい 植栽管理に手間がかかる 植栽に一定の幅が必要で、見学者の通路幅が確保できない
整備委員会及び事務局コメント	施工に手間がかかる 建築工事費用が現代工法より割高になる ３～５年で耐用年数がくるため公共事業としての実施は困難	20 年程度の耐久性あり 城が使用されていた当時の雰囲気と復元した門との調和が一番感じられる案だと思われる ◎	20 年程度の耐久性はあり 復元した門との調和がとれる ○	工法的に半永久の耐久性あり 馬出の機能を解説するサインが必要になる △	H24 年の文化庁復元検討委員会で再考するよう指示あり ×